

# 1月・歴史研修会

## 大神神社初詣と三輪山登拝

1月12日(火) JR三輪駅に26名が集合した。天気は曇りなるも、時々日差しがあり暖かい歴史の日となった。昨年の11回の研修会で8回が晴れた。ならやまの活動日も好天を期待したい。

「二の鳥居」前で川井代表の挨拶の後、掃き清められた参道を厳かな気分で上る。

「大神神社」の祭神は大物主神で出雲の大国主神の亦の名前。国作りが成ったあと自ら求めて三諸山に祀られた。

ここでの予定は、拝殿に昇って奥に建つ独特の「三つの鳥居」(三輪鳥居)を通してお山・神体山を拝むはずであったが、この日は御祓いを受ける参拝者が多く、叶わなかったのが残念であった。

「祈祷殿」広場に移動して古川さんの解説を聞く。

三輪山は太古から自然崇拜の「神奈備信仰」や「磐座信仰」があり、大国主神の国作りが成ってから大物主神という人格神が奉祭された。川井さんからは製鉄の話、井戸さんから三輪山の地質「班礪岩」は噴火ではなく造山活動でマグマが盛り上がり固まったとの説明を受ける。

「磐座神社」は辺津磐座で少彦名神を祀る。つる性の「ガガイモ」の鞘に乗る小さな神様で大国主と共に国土を造ったとされる。

「狭井神社」は大物主神の荒魂を祀る神社で、25名が登拝を申込んだ後、襷を掛けて山に入る。30分ほど登って「三光の滝」の小屋に至る。ここでお二人がリタイア。残る23名は阻道の急坂を登り、やがて中津磐座につく。

平成9年の台風で樹齢数百年の杉や檜の大木が何本も倒れ、切り株だけを残す明るい山となってしまった。かつては鬱蒼と茂る巨樹の森、厳な雰囲気であったことが見てとれる。

さらに急坂を登ると、「鳥山椒」の巨木が群生している。467mの三等三角点付近で、下りて来た遅刻参加の坂東さんに遭遇する。日向御子神を祀る「高宮神社」を過ぎ黒々とした巨石が集まる奥津磐座に着いた。

磐座の巨石群は天から神が降臨してくる古代祭祀の遺跡である。この山の山体を構成する「角閃班礪岩」は、鉄を含む浸食に強い性質のため太古からその美しい山容を維持してきたと考えられる。



登りは1時間15分を要したが、下りは50分で狭井神社に下山した。展望台

からは南大和の平野の拡がりが一望で、二上山や大和三山が遠望できる。古代もかくの如き風景であったかと感慨にふける。

知恵の神「久延彦神社」を認知症に効くことを期待して参ったあと、崇神天皇から召されて、大神神社の初代神主を務めた大田田根子命(大物主神の祖孫)を祀る「大直禰子神社」を参拝する。

二の鳥居前の食堂「福神堂」にて三輪そうめんを肴に、三諸の神酒をいただく。崇神天皇の時代、疫病が大流行して混乱を極めた時、天皇は高橋邑に住む「高橋活日」を杜氏として酒を造らせ、三諸山に鎮坐する大物主神に供して国家安泰を祈願した。かくて疫病は治まり国が富みはじめた。三諸の酒が国を救ったことにより、三諸の大物主を酒造りの神として崇め、高橋活日は杜氏の神として撰社の「活日神社」に祀られている。

「日本書紀」崇神天皇8年の条に活日は神酒を造って天皇に奉って、次の歌を詠んだとある。

「此の神酒は 我が神酒ならず 倭成す 大物主の醸みし神酒 幾久幾久」(このお酒は私が造ったのではなく、倭を造られた大物主神がお造りになったお酒です)

高橋邑は天理の石上神社の北側を流れる布留川の高橋と言われている。

ついでながら「三輪そうめん」の始まりは6世紀末ごろ仏教伝来と共に小麦の栽培と製粉技術が伝えられたときとされる。

この日飲んだ酒はもちろん「三諸の神酒」三諸杉。当日は古川さんの81歳の誕生日であったことから、大いに盛り上がったのは言うまでもない。

(中井弘)